

産業化した有機農業の対抗軸の諸相

——カリフォルニアの小規模有機農家の取組みを通して——

○国際基督教大学 山口富子

1 目的

アメリカ社会における有機食品ブームを背景に、カリフォルニアの<小規模有機農家>は、大規模有機農家による有機農業ビジネスとの差別化という問題に直面している。そこで、本報告は、有機農業のコンベンショナル化理論と、農業社会学内におけるその後の議論を踏まえ (e.g., Coobes and Campbell 1998; Hall and Mogyorody 2001), カリフォルニアの小規模有機農家の近年の取組みの分析を通し、産業化した有機農業の対抗軸について考える。ここでの<小規模有機農家>とは、「有機農業が本来あるべき姿」を目指す農家を指し示す。

2 方法

筆者は、2015年9月から2016年2月まで、カリフォルニア州・セントラルバレーでフィールドワークを実施した。期間中、有機農業関連の市民向けプログラム (National Heirloom Exposition, Urban Farm Tours, Open Farm Events, Hoes Down Harvest Festival, Eco Farm Conference など) に参加し、小規模有機農家の活動について理解を深めるとともに、カリフォルニア州・セントラルバレーに農場を持つ小規模有機農家 (11件) を対象として半構造化インタビューを行った。

3 結果・結論

コンベンショナル化理論は、アグリビジネスやセクター外の企業が有機農業部門に参入することにより、①有機農産物の市場での氾濫にともなう「有機農業」の意味の拡散、②小規模農家の周辺化、③農生態学的に浅い有機農法実践が起こったことなどを示唆している (Buck et al. 1997; Guthman 2004)。確かに、コンベンショナル化理論が示唆するように、有機農業の大規模化・集約化にともない、小規模有機農家がこれまでとは質的に異なる競争にさらされているという状況は、疑う余地もない。しかし、有機食品ブームにともなう有機市場の拡大や、“Buy Fresh Buy Local”といった地産地消を推奨するためのキャンペーンに代表されるようなローカリズムの波を背景に、カリフォルニアの小規模有機農家は「周辺化」という言葉には似つかわしくない、創造性と躍動感に満ちあふれる取組みを展開しているように見受けられる。

カリフォルニアの小規模有機農家の取組みが多様多様であることは言うまでもないが、本報告では、新たな取組みとして次の4つを紹介する：①企業の組織経営のノウハウを活用しローカルフードシステムを推進する「プロ志向型 (professionalization)」の実践 (e.g., The Food Commons), ②新しい形態の CSA (Community Supported Agriculture) の展開 (e.g., 企業との連携), ③ハーブやエスニック野菜に特化したニッチマーケットでの展開, ④消費者教育を重視する教育農場の展開。最後に、本報告では、こうした多様な活動が、産業化した有機農業に対しどのような対抗軸を生みだしているのかについて述べる。

文献

- Buck, D., Getz, C., & Guthman, J. 1997, “From Farm to Table” *Sociologia Ruralis*, 37: 3-20.
Coombs, B., & Campbell, C., 1998, “Dependent Reproduction of Alternative Modes of Agriculture” *Sociologia Ruralis*, 38: 127-145.
Hall, A., & Mogyorody, V., 2001, “Organic Farmers in Ontario” *Sociologia Ruralis*, 41: 399-422.